

# 理想と現実とこれから

ながれ

塚本 啓之 (つかもと ひろゆき/元インターン生・大学院生)

まだ社会を知らない未熟者だが、私の現在の考えを発信したいと思う。理想を語るには、私がどのような経緯でこのような考えに至ったかを知ってもらうことがまず必要だと思ったので、はじめに書かせていただきたい。

## きっかけ

はっきりとした記憶はないが、地球温暖化の問題に関心を持ったある日、家族にその話をしたところ、問題に対する感じ方にギャップがあったことを覚えている。また、貧困が原因で命を落としてしまう子どもたちが世界中にいることを知った時、当時の私は不思議でたまらなかった。「なぜ貧しくて亡くなってしまいう子がいる一方で、僕は何不自由なく生きられているのだろう」と。人間社会の不公平な事実を知ってしまったからは、私はそういった問題を野放しにして生きることはできないと思った。そのような考えに至ってからは、環境問題は私にとっての一番の issue になった。なぜなら、環境問題は途上国のみならず世界全体、人間のみならず生命全体の基盤を脅かすことに加えて、放っておけば将来世代にさらなる影響をもたらす問題であるからだ。

## 将来像

世界レベルでは「あらゆる制約なしに誰もが等しく何かに挑戦できる社会」が理想だと考えている。自分になりたいもの、やりたいことを居住地や貧困などの制約にさらされることなく、思う存分のできる社会。非常に理想が高く、一人でできることには限りがあると認めた上で、その理想を叶えるためにはたくさんのプロセスとアプローチが検討できるが、私にとって

は環境問題の解決がそれに当たる。上記で述べたように、環境問題は生命の基盤を脅かし、現在ある人間社会の課題を複雑化させ得るものであるから、この問題解決は重要なのだ。

日本レベルでは分散型社会が理想であると考えている。現在の都市は経済性や利便性を求めた画一的な開発がなされているように感じる。個々の地域には歴史や文化・地理等の要素において、特徴的な部分が必ず存在するため、「Sense of place」を大切にしたい社会設計が大事になる。また、一極集中は災害や感染症に対する脆弱性を増幅させる要因にもなるため、変化が必要である。

個人レベルでは「余白を持つこと」。私の経験則に基づくと、あらゆる側面において、人生に余白を持たせることは非常に重要であると思う。例えば、多くの予定をスケジュールリングして忙しい日々を過ごしていると、視野がだんだん狭くなって、他の事柄に目が向かなくなる。価値観が多様化した現代こそ、自分を見つめ直したり、関心外の事柄にアンテナを張って行動したりする余白が大切だと感じている。

## 現実と解決への方向性

### 国際：公共財の考え方・指標の転換

人間が作った国家という権力が世界規模の問題解決の足かせになっているが、環境問題に国境はないのだから、その解決には国際的な協調が欠かせない。それと関連して、指標の転換も求められる。資本主義は競争や大量生産・消費・廃棄を加速させ、有限な地球環境に多大な影響を与えてきた。それと同時に、私たちの生き方を混乱させているように思う。なぜなら、人間は幸せになる為に生きて

おり（不幸せになりたいと考える人はいないと思う）、お金は幸せになるための手段であって目的ではないからだ。手段の一つでしかないお金を「豊かさ」の指標とすることに疑問を感じている。皆それぞれ幸せの定義が異なるが、持続可能な社会に向けた新たな指標が求められるのではないかと思う。

### 日本：教育・地方分権

個人レベルに繋がる話として、普遍的に大切な教育が挙げられる。日本の教育が私の小中学校時代からどれだけ変化しているか分からないが、ただ単に知識を暗記するのではなく、「何のためにこの教科を学ぶのか」などの「問い」を考えさせる授業形態にする必要があると思う。自主的に思考し、目的と行動が明確な人が日本にはどれくらいいるのだろうか。VUCAの時代を生き抜くには、柔軟な思考力が求められる。

また、予測不可能な現代においてはスピード感や地域の特性に合った個別具体的な対策が重要になるため、中央集権型から地方分権型にシフトする必要がある。また、行政がより身近なものになることは、市民の問題や課題に対する当事者意識や責任感を育むことに繋がるのが期待される。

### 個人：気候変動問題に対する考えと科学に

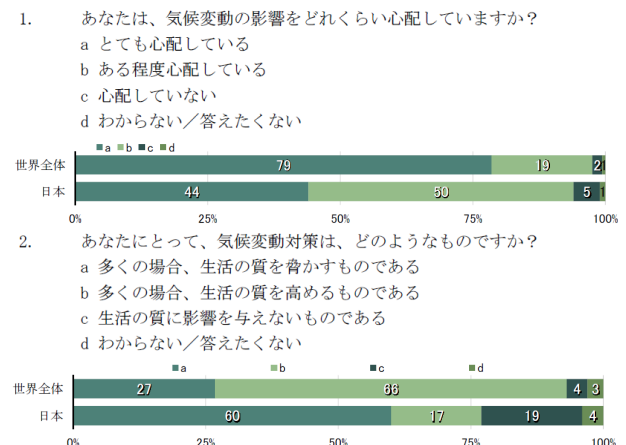
#### 基づく知識のアップデート・ミニマリスト

国立環境研究所の江守先生がおっしゃるように、私も日本の気候変動対策に対する「負担意識」が問題であると考えている。2015年の世界市民会議の結果によると、世界と比較して日本は気候変動対策にマイナスイメージを持っている。(右図)

研究で自治体が調査した個人の気候変動対策行動に関するアンケート結果を調べたことがあるが、「こまめに電気を消す」等の個人の負担的努力の上に成り立つ省エネ行動の

項目が多くみられた。再エネを供給している電力会社に切り替える（家庭の温室効果ガスの約半分は電気由来）等の仕組みから変えていくことが重要で、個人の行動で頑張る省エネでは脱炭素社会には到達できないにも関わらず、多くの国民の環境行動に対する知識はアップデートされていないように感じる。また、有名人がyoutubeやtwitter等で気候変動問題を取り扱っていると、視聴者が懐疑論やプロパガンダに惑わされている（或いは発信している）コメントが一定数見られる。対策として、科学に基づく情報の普及が急を要する。

最後に、日本全体としてワーク・ライフ・バランスの改善はもちろん必要だが、日本人は長時間労働、低収入、情報過多、モノの浪費などによって4つの意味（経済的、時間的、物質的、精神的）で、余白が少ないように感じる。そこで私としては「ミニマリスト」を推奨したい。ミニマリストは不必要なモノを持たないこと自体が環境負荷を抑えるが、モノ以外にも情報や予定など、自分にとって大切なことや必要なことを考え、取捨選択することで本来のやりたいことに集中できると同時に余白が生まれることで視野が広がる。価値観の多様性があることを前提とすると、環境問題が大きなissueでない方にとっても、余白があることで、環境問題をはじめとする多くの課題に目を向けやすくなるのではないかと思う。



出典：科学技術振興機構 世界市民会議開催報告書（2015年）